



ベランダから見下ろすバス
停



fujisyun

大学生の頃、下宿していたアパートのベランダに立って、景色を眺めながら色々空想することが趣味だったことを思い出す。

その頃から私は人嫌いをこじらせ始め、ずっと部屋にこもりきりになっていた。

女子校の派閥争いに嫌気が差していた。大学に入りそれから開放された、という淡い期待を抱いてしまったことが原因なのかもしれない。

期待は失望へと形を変えた。人とうまくやっていけないのは結局は私の性分だったのだ。

ある日、ベランダの向かいにあるアパートの塀の上に、空になったジュースのペットボトルが置かれていた。

飲んだものをゴミ箱に捨てることも煩わしがる人が、そこに置いたものなのだろう。

それは見つけた次の日にもそこにあった。

それは見つけた次の週にもそこにあった。

それは見つけた次の月にもそこにあった。

結局それは記録的な暴風雨があった日までそこにあった。

まるで私みたいじゃないか。

毎日そのペットボトルを見下ろしながらそんな薄暗い空想にふけていた。

誰にも気にも留められず、いてもいなくても害をなさず、只々時間が過ぎていくのを待っている。

何てこともないモノを触媒に空想する癖はその頃ついたのだと思う。

今更そんなことを思い出したのは、今飲んでいる缶ジュースがそのペットボトルと同じ銘柄だったからだ。

六月のむせ返るくらい湿った空気、重く立ち込めた曇天、まだ昼を少し回ったくらいなのに驚くほど薄暗い。

あの時ベランダから見下ろしていた景色とは異なる景色を、煙草を吸いながら見下ろしている。三年も経てば住む場所も変わるし境遇も変わる。

こんな私でも死ぬ気でやればそこその企業に就職できた。仕事もそれなりに楽しい。

大学生の自分を「こじらせていた」と片付けてしまいたいのが、今でもその時の薄暗い空想をする癖は抜けないし、休日に外を出歩くことなんて滅多にない。

今日は風が強い。吐き出した煙もすぐ何処かに流れていってしまう。

ベランダに据え付けられた室外機の上には、吸殻で山盛りになった灰皿が置かれている。そのうちの何本かは転がり落ちて足元に散らばっていた。

吸い終わった煙草を投げ入れるが、案の定吸殻の山の斜面を転がっていく。
柵に片肘をついてぼーっと風景を眺める。何という無駄な休日の過ごし方だろう。

四階からはそこまで遠くを見渡せない。なんとも中途半端な高さだ。
真下にはそこそこ車通りの多い街道。住宅街の隙間にちらほら見える木々は、風に煽られざわついている。
鈍い光に照らされ、色彩とコントラストを失った風景は私を陰鬱にさせる。
いつまでもこんな事を続けていてはいけない、また塞ぎこんでしまいそうだ。あともう少ししたらやめよう。

そうしてなかなか止め時を見つけられずに過ごしていると、真下の街道、私が住むアパートのちょうど正面にバス停が立っていることに気がついた。
もうここに越してきて半年も経ったのに、初めてその存在に気づいた。
あんなところにバス停があったのだな。そういえばこの道はバスが走ってたっけ。

電車通勤の私には、そのバス停と縁がない。だから今まで気がつかなかったかもしれない。
それにしてもアパートの正面だろう、どれだけ私は無関心なんだ。自分でも少し可笑しくなった。
そろそろ切り上げよう、煙草も吸い終わったし寒くもなってきた。
手にしていた缶ジュースの残りを一気にあおった。

手にした缶ジュースの柄が、記憶の中のペットボトルのそれと重なる。
そうか。
昔見たペットボトルもあのバス停も同じだ。
誰にも気も留められない、いてもいなくても害をなさない。
昔の私のような存在。

とりあえず財布を持って、適当な服を羽織って化粧もせずに玄関を出た。
誰にも気を留められないなら、せめて私はしっかりとその存在を確かめておきたい。
そんなよくわからない衝動のために、普段はしない外出をするのは割に合わない。
少し歩いて近くのコンビニにでも寄って行こう。

アパート正面の街道は昼時とはいえ車が沢山走っている。
タイミングを見計らって、ようやく反対側に渡ることができた。
いままで私に気づかれなかったバス停はそこにあった。
つい最近取り替えられたものなのだろう。暗い茶色をしたフレームはどことなく上品で、真新しさを感じさせるものだった。

手で触ってみる。ひんやりとした手触り。

少し揺らしてみる。支柱は地面に埋め込まれていて、数センチ揺れ動いただけだった。

五感を以って私は誰にも気に留められないこのバス停をしっかりと感じた。

昔の自分がそうしてほしかったように。

今の自分はどうかだろう。誰かに気に留めてもらえてるだろうか。

バス停を撫でながら自問する。

ぷしゅーっという空気が漏れる音。

自分でも恥ずかしくなるほどセンチメンタルな気分になっていた私は、突然聞こえたその音にとでも驚いた。

ふと見るとバスが停まっている。私が乗るのを待っているようだ。バスの運転手が怪訝な顔で私を見ている。

何かきまりが悪くなってつい乗り込んでしまった。

バスは特有の加速と減速を繰り返し走る。

車体が揺れ、そのたびにつり革が揺れる。

どこか適当な所で降りなければ。歩いて帰るのはとても億劫だ。

そんなことを考えていると機械的な女性のアナウンスが流れ、バスが停まる。空気が漏れる音と共にドアが開く。

乗ってきた若い女性とおばあさんが座席につくとまたバスは走り出す。

そんな光景を眺めながら、誰にも気を留められない、というのは私の思い違いだったことに気づく。

乗り込んできた二人にとってはそのバス停は大切な存在なのだろう。

ただ立っているバス停から語りかけることもあるのだ。

気にも留められない私から語りかけることもあったはずなのだ。

あの時の私は「気に留めてもらいたかった」から、自分から働きかけることをよしとしなかったのだ。

そして誰にも気を留められない自分は、誰もを遠ざけようとしたのだ。

放置され、誰にも気づかれず、いつの間にか消えてしまったあのペットボトルのようになることに甘んじていた。

自分から人に働きかけるのは大変なことだったから。

そんなことを考えてると、昔の卑屈な自分と、今もそれを引きずっている自分が急に馬鹿らしく思えてきた。

このまま駅前まで行って底抜けに明るい映画でも借りてこよう。

同僚からの飲みの誘いも乗ってみよう。

くだらない空想で、前向きにもなれてしまう性分も悪くはないかな、と思った。

終点についたのでバスを降りる。

駅前の喧騒が心地いい。曇天に切れ間ができ、そこから黄金色の光の筋が漏れている。

まさに今の私の心を写したような空模様だ。曇天を切り裂く一筋の光明。

私はバス停にありがとうを言う。